
CATAPULT —カタパルト—

桃山マサル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CATAPULT | カタパルト |

【Nコード】

N7197M

【作者名】

桃山マサル

【あらすじ】

少女と青年が世界を破壊し尽くす話。

戦場の二人（1）

これは、少女と青年が、世界を破壊し尽くす話である。

某所で二つの勢力が戦争をしていた。

平原で何の遮蔽物もない。姑息な知略などもない。お互いの全兵力を正面からぶつけ合う、シンプルな真っ向勝負だった。

今のところ、赤い軍旗を上げた方が劣勢だった。

「カタパルト部隊、整列！」

櫓の上に立っている赤の軍団の中隊長が、号令を掛ける。

歩兵たちがぶつかり合う前線から自陣側に百メートルほど下がった位置に、数十人の兵士たちが前線と平行に並んだ。

兵士たちの手には、Y字型をした全長約二メートルの棒状の物体。弓でも槍でも銃でもない。

射出兵器カタパルト。

それがその武器の名だった。

「弾装填！」

兵士たちは一斉にカタパルトの分かれた枝の先を背中に回した。そこにはあらかじめ輜重隊に運ばせておいた鉄球が置かれていた。鉄球は人間の頭ほどもある。

カタパルトの先端が鉄球に近付くと、枝先から常時放出されているエネルギーによって発生している力場に吸い込まれて、Y字の分かれた枝の真ん中に“装填”された。装填された鉄球は力場内に渦巻くエネルギーの潮流に翻弄されて、わずかに揺れ動いている。

「発射準備！」

数十人の兵士たちは鉄球の装填されたカタパルトの先端を、自分

の頭よりも少し高い位置に持ち上げた。そのままの姿勢で指示を待った。

中隊長は櫓から前線の様子を伺っていた。

やがて、伝令通りに、自軍の前線がわずかに後退した。

「撃てえ！」

兵士たちはカタパルトを振り切った。

遠心力とエネルギーの噴射によって撃ち出された数十個の鉄球は、綺麗に一列に並んで空へと舞い上がり、敵軍の頭へと降り注いだ。

肉が潰れ、骨が砕け、血飛沫が迸り、悲鳴が上がった。

緑色の旗を上げた軍の歩兵たちはわずかにたじろぎ、攻め手を緩めた。

それを好機と見て、巻き添えをくらわないよう距離をとっていた赤旗の歩兵たちが、一気に敵軍へと突撃した。

「カタパルト部隊の中隊長殿は、どちらでしょうか？」

場違いな声が、中隊長の耳に届いた。

櫓から身を乗り出して見てみれば、二十歳前後の青年が櫓の下に待機していた伝令兵に話しかけていた。

戦場には似つかわしくない、人畜無害そうな顔をした青年だった。

「中隊長は私だが？」

青年は顔を上げた。

「ああ、どうも、遅れてすみません。キリンと申します」

「キリン？」

中隊長は顎鬚を撫でた。

「ああ、そう言えば本部から特殊な傭兵を援軍として送ると通達があったが、もしかして君のことか？」

「はい」

中隊長は軽い憤りを覚えた。

緊急の援軍に大きな期待をしていた訳ではない。しかし今は劣勢

で、厳しい戦いを強いられている。それなのに、本部が送ってきたのが、人も殺したことのなさそうな青年一人とは。

「あ、僕一人じゃないですよ」

中隊長の心を読んだかのように、キリンと名乗った青年は一步横にずれて、後ろに立っていた少女を紹介した。隠れていた訳ではない。小柄だからキリンの身体で見えなかったただけだ。

「リスです」

少女は至極簡単に自己紹介した。

憤りを通り越して、中隊長は呆れた。

どうみても少女は成人もしていない、十代半ば頃であろう子供だった。女というだけでも十分なのに、さらに子供となっては追い返す気にもならない。

「君たちは……あー、何だ、何しに來たんだ？」

思わずそんな質問をしてしまった。

「もちろん、援軍として」

「戦えるのかい？ 相手を殺せるのかい？ 特にそこのお嬢ちゃんなんか、虫も殺せないような顔してるじゃないか？」

「本部からの要請で來たんですよ？ 少しは信用して貰わなくては」
「それもそうだ、と中隊長は思った。役立たずの女子供を戦場に放り込むほど、我が軍の参謀は悪趣味ではない。」

「ではさっそく仕事をしてもらおうか」

「はい」

「ところで、君たちは武器を持っていないのかね？」

二人は丸腰だった。

青年の腰にはいくつかのポーチが下がっているが、武器が入っている訳ではなさそうだった。

「ありますよ」

キリンは手を前に突き出した。

音も無く、長大なカタパルトが空中に出現した。

カタパルト部隊の兵士が持っている物よりも、倍近く長いカタパ

ルトだった。青年は宙に浮かぶカタパルトを手を取った。

近くにいた伝令兵はうわずった声を漏らし、中隊長は目を丸くした。

「君は……秘術士だったのか」

「ええ」

「カタパルトを持ち出したということは、カタパルト使いでもあるのかね？」

「いいえ」

青年は手に持ったカタパルトを、隣の少女に渡した。

四メートル近くあるカタパルトと、その半分の身長もない少女。

滑稽なまでに不釣り合いな光景だった。

「カタパルト使いは、彼女です」

中隊長は驚くと同時に、納得した。

「秘術士とカタパルト使いのコンビか……なるほど、ようやく合点がいったよ」

「分かってもらえましたか」

「ああ。では、君たちはどうするかね？ 我がカタパルト部隊に加わって私の指揮下に入るか、もしくは遊軍として単独で動いてもらっても結構だが」

「どうする、リス？」

青年は少女に尋ねた。

少女はちらっと前線の方角を見た。

「……いけると思う」

「そう。じゃあ、そうしよう」

中隊長はまたも首を傾げた。

「どう決まったんだね？」

「遊軍として行動します」

「そうか。じゃあ、全軍にそのように伝令を出しておこう」

「あ……」

青年は何かを言いかけた。

「何だね、何か質問か？」

「いえ、あの……お願いします」

歯切れの悪い物言いに、中隊長は眉をひそめた。

「意味ないのに」

そう呟いたのは、カタパルトを肩に乗せた少女だった。

「伝令が伝わる頃には、終わる」

「何だって？」

中隊長は声を上げた。

「リス」

青年はたしなめようとしたが、少女は続ける。

「おじさん」

少女は始めてまともに櫓の上へと視線を向けた。

「兵隊さんたちを下げて。あのくらいなら、大丈夫だから」

「お嬢ちゃんは、何を言っているんだ？」

「多分、私とキリンだけで、いける」

少女の言っていることを理解するのに数秒を要した。

理解してから、中隊長の胸中に色々な感情が駆け巡ったが、中隊長は指揮する立場の人間として、つとめて冷静に言葉を紡いだ。

「……随分な自信だ。しかし兵士たちを下げることはできない。君たちを見くびっている訳ではないが、そこまで信用している訳でもない」

「そう」

あっけらかんと少女は返事をした。まるで断れることを承知の上での進言だったかのよう。

「行こう、キリン」

「あ、うん」

二人は兵士たちの間を縫って、櫓から離れていく。背の高いカタパルトの先端が、少女が歩くのに合わせてひよこひよここと上下していた。

「中隊長！」

途中で青年が振り向いて、櫓の上の中隊長へと叫んだ。

「せめて後退の準備はしておいた方がいいと思います！」

二人の背中が兵団の中へ消えた。

中隊長は口をへの字に曲げて、鼻から息を吐いた。

「二周り近くも年の離れた子供にあんなことを言われては、世話ないな」

戦場の二人(2)

緑の軍勢は数の上で優位を保っていたが、少しの油断も許されない状況だった。

先程から赤の軍のカタパルト部隊が断続的に鉄球の雨を降らしてくるので、前線の兵士たちの足が止まってしまっている。緑の軍にはカタパルトを大量に生産するだけの資金的・時間的余裕がなかった。代わりに弓兵で応戦したが、武器としての性能はカタパルトの方が勝っている。じわじわと、赤の軍勢に押し返されていた。

「耐えろ、今は耐えるんだ！ いずれ敵のカタパルトはエネルギー切れを起こす！ それまで持ち堪えるんだ！」

歩兵長は兵士たちを鼓舞するように、大きく声を張り上げた。

火花と血肉が飛び交う最前線。足元には死体。血溜まりの中でうつぶせに転がっている兵士は、味方なのか敵なのかも分からない。原型をとどめているのはマシな方で、中には肉塊と化している死体もあった。

敵兵が剣を振り上げてこちらに向かってきた。

兵長は自分の剣でそれを切り伏せる。呻き声を上げることなく、敵兵は地面に崩れ落ちた。

「兵長！」

歩兵の一人が血相を変えて駆け寄ってきた。

「何事だ」

「奇襲です！ カタパルトを持った少女が――」

地面を揺らす衝撃。それと爆音。

兵長は音のした方向に顔を向けた。

前線の左端。そこから土煙が立ち昇っていた。

「奴らです！」

報告に來た歩兵が指を差した。

兵長は目を凝らす。

巨大なカタパルトを構える少女。隣には瘦身長躯の青年。

「何だ、あいつらは。正規兵には見えないが」

「分かりません！ 分かりませんが、とにかく強いです！」

またすぐに爆発。

少女のカタパルトにはいくつもの赤い球状の弾が装填されていた。それを絶え間なく撃ち出す。赤い球は地面に着弾すると、大規模な爆発を起こした。周囲にいる兵士たちは吹き飛ばされ、運悪く至近距離にいた兵士は身体の半分を抉り取られて死亡した。

止まない爆音と悲鳴。

見る見るうちに、緑の軍勢の戦列は崩れていった。

「何をしている！ カタパルトを持っているとは言え、敵はたったの二人だろう！」

兵長は顔を真っ赤にして叫んだ。

「ですが、あんなに連続で弾を撃たれては近づけません。一撃の威力も高いですし」

「だったら弓で狙えばいいだろう！」

「それが――」

丁度、弓兵の一人が少女に向かって矢を放った。

寸分の狂いなく矢は少女へと飛んで行ったが、その鏃が少女を貫く直前で跳ね返された。

隣にいる青年の指先が、わずかに光を帯びていた。

「秘術士か……！」

兵長は齒軋りをした。

近付くこともできず、遠距離からの攻撃も跳ね返される。

「第一、第二小隊、全滅しました！」

前線には爆音と阿鼻叫喚がこだましていた。

ふと、少女の目がこちらを向いた。無表情で、血の通っていないさそうな冷たい瞳が兵長を見据える。その瞳が語っていた。

もう、無理だよ、と。

「撤退！ 撤退だあ！」

伝令兵の一人が高らかにラッパを鳴らした。

緑の軍勢は一斉に撤退を始めた。

しかし、五百メートル超の射程を誇る少女のカタパルトの前では無意味だった。逃げ惑う兵隊はもはや的でしかなく、少女の撃ち出す弾に次々と倒されていった。

少女が緑の軍勢を壊滅させるまで、二十分もかからなかった。

後に残ったのは、死体の山。

赤の軍勢の兵士たちは呆然と立ち尽くしていた。

土煙の中から、少女と青年が姿を現す。顔はほこりまみれで、血溜まりを踏みしめた靴は真っ赤に染まっていた。

中隊長が二人を出迎えた。

「き、君たちは」

中隊長の声はわずかに震えている。

「よくやってくれた。流石は本部が特別に呼び寄せただけはある」

二人は中隊長の話にあまり興味がないようだった。

リスはカタパルトをキリンに手渡した。キリンはカタパルトを受け取ると、軽く振った。カタパルトは空気に溶けるように消える。

「えー、このたびの功績を称えて、君たちに褒章を贈りたいと思うのだが、どうだね？」

「その申し出はありがたいですが、遠慮しておきます」

「ではせめて本部に戻って共に夕食でも……」

「残念ですけど、次の依頼主が待っているのです。あ、報酬は前払いで頂いてるので、大丈夫ですよ」

「そ、そうか」

「では、失礼します」

二人が歩き出すと、兵士たちは道を開けた。千人規模の兵団が二つに割れる。

「君たちはっ」

中隊長が声をかけた。

二人は顔だけ振り向かせる。

「どこかの軍隊に入る気はないのかね？」

「今のところ、ありません」

「しかし、それだけの力を持ちながら、勿体無いとは思わんのかね？」

「いえ」

「そうか……」

「でも、格好いいと思います」

青年は微笑んだ。

「誰かのために戦うということは、すごく格好いい」

「ならば」

「でも、僕らは、違うから」

青年と少女は顔を見合わせた。

「僕らは、いつだって自分勝手だから」

そう言い残して、二人は去っていった。

残された兵隊たちは、その背中を何も言わず見送った。

＊ 戦場の二人 おわり ＊

要塞ブラッディマリアの歓楽（1）

血塗れたマリアと名付けられた要塞は、森に挟まれた道のど真ん中に居座っていた。

はつきり言って邪魔だった。

特に交易の邪魔だった。道を通り、要塞を抜けるためには通行料を払う必要があり、けっこう馬鹿にならない金額だった。行商人たちは揃って、あんな要塞などさっさとなくなってしまう方がいいと思っていた。

しかしブラッディマリア要塞は防衛の要でもあった。道の東西の両端には仲が良いとは言えない二つの町があり、この町たちはつまらないことで小さな諍いを繰り返していた。

現在のところ要塞を所有しているのは東の町だった。しかし去年の秋は西の町だった。去年の秋には「小麦の出来と品質の違い」について争いがあった。諍いがあるたびに要塞の所有権が変わった。道の真ん中にある要塞が敵の手にあるというのは、要塞を持っていない方の町にしてみれば脅威以外の何ものでもない。要塞を手に入るために、どうしてもいい名目で戦争を起こすこともたびたびあった。そのたびに駆り出される私有兵たちにとっては、たまったものではなかった。二つの町の兵たちも、争いの種にしかない要塞なんてさっさと潰れてしまえばいいと思っていた。

ステンドグラスから色とりどりの光が、教会の床に降り注ぐ。少女は椅子に踏ん反り返って座っていた。あまりいい態度とは言えなかった。青年は神父の前に立ち、ちゃんと話を聞いている。

「血塗られた要塞を、あなたたちに落としてもらいたい」

白い髭の神父は、神に祈るように、二人に頼んだ。

「あの要塞はもはや墓標でしかない。毎年、何人もの若者たちがあの要塞を巡る戦いで命を落とす。このままでは東の町とこの町は共倒れになってしまう。実際、定期的に訪れていた行商人たちの姿も、年々減ってきている」

「分かりました」

青年は頷いた。

「リスもいいよね」

振り向いて、少女に確認した。

「うん」

「おお、ありがとうございます」

西の町の神父は手を合わせて、拝むように頭を垂れた。

リスはもう用なしといった感じで立ち上がる。

二人は教会から出た。

少女は太陽の眩しさに目をしかめた。

「今回は、どう？」

宿屋への道を肩を並べて歩きながら、キリンはリスに訊いた。

「簡単そう？」

「なんとも言えない」

「今から下見に行こうか？」

「いいよ。どんなに難しい依頼でも、結局やることは変わらないんだから」

「それもそうだね」

と、キリンは苦笑した。

宿屋に戻った二人は、一緒に部屋に入った。

リスはそのままベッドに横になった。夕飯前である。寝るには早い。しかしリスはベッドに寝転がって瞑想するような時があった。それをキリンも分かっていたので、リスに対して何も言わなかった。共有財布を手にとると「ちょっと買い物してくるね」と小さく言って、部屋を出て行った。

リスは目をつぶって、静かに意識の奥底へと落ちていった。

要塞ブラッディマリアの歓楽（2）

少女が夕闇に包まれた部屋の中で、ゆったりと瞼を持ち上げると、そこには青年の顔があった。

「地図を貰ってきたよ」

キリンは毛布の上に羊皮紙を広げた。

そこには二つの町と、それを結ぶ道の地図が描かれていた。少女は起き上がる。

「見て」

キリンは地図の上に指を置いた。

東の町と西の町。今二人がいるのは西の町。太陽が沈む方だ。キリンは西の町の出口に指先をつけ、つつつ、と道をなぞった。

「いいかい、要塞があるのは、ここだ」

要塞は本当に道の間地点にあった。周りは森で囲まれている。

「要塞にはどうやって行こうか？」

「選択肢は？」

「二つ。徒歩、馬車」

「徒歩で。ただし――」

「分かっている。僕の術で気配は消していこう」

少女は眉をひそめる。言葉を遮られたのが気に食わなかったらしい。細っこい足で、キリンの横っ腹を蹴った。キリンはぐっと息を詰まらせた。

「それだけ？」

「ああ、あと要塞の構造なんだけど」

「なに」

「周囲には堀があって、三メートルくらい高さの石造りの城壁がある。そしてその中には塔があって、今はそこに東の町の私有兵が約五十人、傭兵が三十人くらい詰めてる」

「ふうん。彼らは？」

「できるだけ生かして欲しい。僕たちの目的は、あくまで要塞の破壊だ」

「でも巻き添えになっちゃうのは仕方ないよね」

「ああ、それは仕方ない」

二人は顔を見合わせる。お互いに罪悪感の欠片もない顔だと、思った。

「あとは？」

「決行は明日でいいよね？」

「うん」

「じゃあ、これで作戦会議は終了」

キリンは地図をしまい、窓の外を見た。星が空を覆いつつある。

「夕飯、どうする？」

「食べる」

「うん。どこで？」

「どこでもいい」

「分かった。じゃあ、身支度して出かけよう」

「うん」

少女は小さく溜息をついた。着替えるのが億劫だった。

「帰ってくる途中にね、羊肉が美味しそうなレストランがあったんだ。そこに行こう」

「本当にそれ、羊？」

リスは怪訝な瞳で青年を見る。

「犬の肉だって言うのかい？」

「かもしれない」

「でも、何の問題もないだろう？」

「そうね」

二人はそれなりの服装に着替えると、宿屋を後にした。

要塞ブラッディマリアの歓楽(3)

翌日。

「ところで」

二人は石畳の道の上を歩いていった。よく舗装されている。

「どうしてあの要塞が、血塗れたマリアなんて物騒な名前で呼ばれているか、知っているかい？」

「知らない。知る必要がある？」

「ないよ」

真っ直ぐ、見張りの目など気にすることなく、二人は要塞へと歩いていく。

二人の足元に影はない。

「でも僕が話したいから、話していい？」

「うん」

「あの要塞はね、もともと処刑場だったんだ。東の町と西の町、共有のね。何人もの罪人があの場所で拷問を受けた挙句、断頭台に上げられた」

「ふうん」

「マリアっていうのは、あの要塞を建設した女性の名前だよ。確か、東の町の町長の娘だったと思う」

「ふうん」

「でね、面白いのはここからでね。西の町にはマリアさんの恋人がいて、二人はまるで戯曲のなかの恋人みたいに結婚を反対されていて――」

「ねえ」

リスは至極不機嫌そうに、キリンを横目で睨んだ。

「もう、いいよ」

「そうだね。この話はもう百年近く昔のことだ。今更僕らが知ってもどうしようもない」

二人は要塞を見上げる位置まで来た。

キリンの情報通り、城壁の周りには堀があった。堀の幅は十メートルほど。目の前には跳ね橋があり、今は閉まっている。その向こうには三階建ての塔がある。太陽が高く昇り始めた今頃は、昼食の準備でもしているのではなからうか。

「ここまで気付かれずに来れたってことは、中には秘術士はいないみたいだね」

「そうね」

「術、そろそろ解こうか？」

「うん」

二人の足元に影が復活した。

少女と青年の姿が白日に晒されても、城壁の上にいる見張りはしばらく彼らに気付かなかった。

「キリン」

「うん」

少女の合図で、キリンは空中からカタパルトを取り出した。

リスはキリンからそれを受け取ると、肩に乗せた。

「どこからいく？」

キリンが少女に尋ねたとき、ようやく見張りが二人に気付いた。大声を上げて、城内の兵たちに知らせる。跳ね橋の向こう側がとにかく騒がしくなる。

「まずは突破口をつくる」

「うん。いいね」

青年は後ろに下がった。

「お前ら、何者だ！」

見張りが二人に向かって叫んだ。馬鹿みたい、とリスは思った。壊されなくなったら、背負っている弓矢で、問答無用に撃ち抜けばいいのに。もっとも、それを後ろの青年は許しはしないだろうけど。

リスはカタパルトの取手部分を両手でつかみ、先端を背中に回し

た。

「球の赤」

「はい」

キリンは腰のポーチから、心臓くらいの大きさの赤い球を取り出して、リスの背中に放り投げた。リスはそれを振り向くこともせずY字の枝の中間でキャッチする。

リスはカタパルトを大きく振りかぶった。

見張りは目を剥いた。リスの挙動の危険さを、さすがに理解したようだった。慌てて見張り台から降りようとする。

「馬鹿みたい」

リスはカタパルトを思い切りスイングした。柄がしなり、ぶんと鋭い音を立てて空気を引き裂く。くぐもった破裂音がして、赤い球がカタパルトから射出された。撃ち出された球は、目にも止まらぬ速さで跳ね橋に着弾する。

そして轟音。衝撃が森を揺らした。

粉々に碎ける城壁。立ち昇る土煙。兵たちの怒号と悲鳴。飛来する瓦礫など気にするはずもなく、むしろ瓦礫で堀が埋まったことを幸運と思い、リスとキリンは破壊された跳ね橋から、要塞の中へと突入した。

要塞ブラッディマリアの歓楽（4）

城壁の中へと入った二人に、弓矢の一斉射撃が襲い掛かった。

「リス、伏せて」

キリンは冷静に対処した。

つつ、と指を宙に滑らせる。指先に沿って光の筋が走り、飛んで来た矢は全て弾き返された。

「秘術士がいるぞ！ 町から援軍を要請しろ！」

兵長らしき男が塔の二階テラスで叫んでいた。

「キリン、同じの」

「はい」

青年は先程と同じ赤い球を取り出して、放り投げた。リスはそれをカタパルトでキャッチして、躊躇なく塔の二階に向かって撃ち出した。

「うわっ！」

兵長のすぐ横を通過して、弾は二階の壁に着弾した。

爆音。

何人かの兵士が瓦礫と共に空から落ちてきた。ぐちゃっと、地面に落とした卵が潰れるような音がした。二階テラスの半分がごっそりと無くなっていた。兵士たちのベッドやテーブルが壊れた壁から見えた。

「援軍が来る前に終わらせたいな。秘術士が来ると面倒だから」

青年が呟いた。聞いている者などいない。

「リス、追加の弾いるかい？」

「もういい。あとはその辺の瓦礫で十分」

「えー、せっかくだくさん作ったのにな」

ハイキングで気合を入れて弁当をつくったお母さんのような口調で、キリンは言った。

兵士を百人近く常駐させるだけあって、ブラッディマリア要塞はそれなりに広かった。少女が全力で走っても、城壁の端から端まで一分ほどかかる。もちろんカタパルトを持っているので走る速度はだいぶ落ちてはいるが。

剣を持った兵士が崩れた壁の影から飛び出してきた。

リスは瞬時に反応し、装填してあった人間の頭部ほどの瓦礫を、兵士の腹めがけて発射した。兵士は口から何か汚い物を吐き出しながら、要塞の奥へと飛んでいった。

「リス」

「何」

キリンは話しかけながら、絶え間なく二人に降り注ぐ矢を、秘術で防いでいた。

「昨日も言ったけど、あまり兵士は死なせないように」

「正当防衛は良い訳にならない？」

「なるよ。でも限度がある」

「そう」

リスは分かったのか分かってないのか、判断がつかない返事をした。

地面に転がっていた瓦礫を新しくカタパルトに装填する。装填口には数個の瓦礫が浮いていた。いつでも射出できるようにである。

瓦礫で要塞を破壊し、壁が崩れ、さらに瓦礫が増える。それを弾にして、また要塞を壊す。カタパルト攻城戦の典型だった。破壊すればするほど、戦いやすくなる。

「それにしても、意外と頑丈だね」

キリンは塔を見上げた。

三階建ての塔は、かじられたケーキタワーのように、あちこち崩れて中が丸見えになっていた。全体の四分の一ほどがカタパルトの射撃によって削られ、要塞としての機能は完全に失っていた。

それでも兵士たちは涙ぐましいほど必死に少女と青年を打ち倒そ

うとしてくる。勝負はもうついているのも同然なのに――意地な
だろうか、それともそれだけこの要塞が大切なのか、少女と青年に
は分らない。

「あとどれくらいかかりそう？」

「このままだと三十分くらい」

「駄目だ。それじゃあ援軍が来ちゃう。どうにかならない？」

「なるよ」

青年はおつと言った感じで、少女の方を見た。

「どうするの？」

「中から破壊する」

「なるほど」

要塞は外部からの攻撃を想定して設計されている。内側からの破
壊には案外弱い。

「でも建物が崩れてきて危ないよ」

「三階から順番に壊してく」

「中には兵士もいるよ」

「もうだいたいなくなった」

死んだか、逃げたか、どちらにせよ、兵士は半分以下に減って
いた。

「そうか。僕がついていく必要がある？」

「ない」

「室内じゃ弓矢は使えないもんね」

少女にとって脅威なのは、遠距離攻撃だけだった。剣を持った兵
士ならば近付く前にカタパルトで倒すことができる。

「じゃあ、頼んでいい？」

「うん」

「僕は外にいる兵士をひきつけておく。あわよくば倒しておく」

こく、と少女は頷いて、崩れた壁から塔の中へと入っていった。

青年はそれを見送る。同時に胸の前で素早く印を描いた。

「ぐっ」

不意打ちしようと背後から忍び寄ってきた兵士が、膝をついた。

「大丈夫。僕はリスと違って殺したりはしないよ」

振り向き、キリンは指を跪いた兵士の頭の上に載せた。すつと、兵士は瞼を閉じてその場に倒れる。口からは気持ちよさそうな寝息が漏れていた。

「さてと」

キリンはその場から離れる。

頭上から衝撃音。キリンが見上げると三階の壁がぶち破られたところだった。壁の破片がこちらに向かって落ちてきて、キリンは指を動かしてそれを回避し、残った破片が寝ている兵士の頭の上に落ちた。

「あっ」

キリンが声を上げたときには、もう兵士の頭は破片の下敷きになっていた。

「……まあ、巻き添えは仕方ない」

そう言って、キリンは肩をすくめた。

要塞ブラッディマリアの歓楽(5)

綺麗な眺めだと思った。

リスは三階の床に立っている。ただし三階の壁も天井も破壊し尽くしたので、今は三階というよりも“屋上”と言った方が相応しかった。

手を止めて、リスは世界の光景を見渡した。どこまでも広がる森。空は快晴。左右に伸びる石畳の道は、太陽を反射してきらきらと光っている。何て美しい景色だろう、とリスは思った。

「順調だね」

キリンは跳ね橋のあった場所から、塔を見上げていた。

周りには眠っている兵士たちが散らばっている。もう塔の外には動いている兵士はいなかった。

「……うう」

「あ、起きた」

青年の横で寝ていた兵士が、呻き声を漏らしながら、必死に上半身を持ち上げようとしていた。キリンは術をかけ直そうと思ったが、兵士の下半身が瓦礫に押し潰されているのを見て、やめた。

「お前は……お前らは」

「僕らは西の町に頼まれて、この要塞を破壊しに来たんだ」

「……そうか、西の町が」

「うん。別に東の町に戦争を仕掛けようってわけじゃないんだよ。両方の町にとってこの要塞が害悪にしかないから壊してしまおうっていう、まあ、一種の優しさだね」

「俺たちは……そのための犠牲か？」

「犠牲にするつもりはなかった。結果的にたくさん犠牲が出たけど」
兵士は短く息を吐き出した。口の端に血が流れた。

「こんな稼業だ。皆、覚悟はできている」

「偉いね」

兵士は自分の下半身を見た。

「俺も助からないな」

「そうだね」

「俺を助けるつもりは？」

「ないよ。下手に抵抗されると困るから」

「そうだな。その通りだ」

二人は古い友達同士のように笑い合った。

「一つだけ、頼みを聞いてはくれないか？」

「内容による」

「この要塞が、元処刑場だったことは知ってるか？」

「知ってるよ」

「マリアという女性のことは？」

「知ってる」

「彼女の恋人のことは？」

「東の町にいたジョッシュっていう大工の息子のことだね」

「ならば二人の恋のことも知ってるな？」

「もちろん」

「では頼みたい。この要塞の地下には二人の思い出の品が残されている。それを東の町、西の町、どちらでもいいから届けてくれないか？」

「地下だね、分かった」

「ありがとう」

兵士は安堵の表情を浮かべた。

「眠る？」

「頼む」

キリンは兵士の額に指先をつけた。兵士の瞼がすんと落ちる。

若い兵士は永い眠りについた。

「良い顔だ」

羨ましいな、とキリンは思った。

要塞が瓦礫と果てるまで、長い時間はかからなかった。

土煙の中から、カタパルトを携えた少女が姿を現す。顔は埃まみれで、服もあちこちが破れてぼろぼろになっていた。

キリンは少女を出迎える

「ご苦労さま」

「うん」

ポーチから取り出したハンカチで、少女の顔を拭く。

「怪我はない？」

「ない」

「服、新しいの買わなくちゃね」

「ひらひらしたのは嫌」

「もう少しお洒落に気をつかった方がいいよ」

「面倒くさい」

「そう」

青年はハンカチをポーチにしまった。

「悪いけど、もう一仕事してもらいたいんだ」

「何」

「あそこら辺の瓦礫をどかして欲しい」

青年は指を差す。

「どうして？」

「あそこに地下への階段があるはずだから」

「地下？　ここ、地下あったの？」

「階段が隠されてるから普通は分からないだろうね。僕も話を聞くまで分からなかった。でも透視してみたら、確かにあったよ」

「分かった」

少女はさっそく作業にとりかかった。

指定された場所の瓦礫をカタパルトに装填し、離れた場所に撃ち

出す。それを繰り返して、その場所から瓦礫を取り除いていく。

すぐに階段の蓋らしきものが見つかった。

青年はわずかに凹んでいた取っ手を見つけて、力任せに引っ張ってみた。

ガコ、と何かが外れる音がして、蓋が持ち上がる。

そこには地下への階段があった。湿ったカビの臭いが階段の奥から立ち昇ってくる。

「行くの？」

少女が嫌そうな顔をして訊いた。

「うーん、頼まれたから、行くしかない」

「わたしも？」

「リスはここで待っててもいいよ」

少女は少し逡巡した後「わたしも行く」と言った。

「そう。じゃあ行こう」

「これ」

少女はカタパルトを軽く持ち上げた。

「あ、大きすぎて入らないか」

キリンはリスからカタパルトを預かると、いつも通り空中に溶かした。

「じゃあ、改めて」

二人は地下への階段を降りて行った。

要塞ブラッディマリアの歓楽（6）

「麒麟」

「何だい？」

「せっかくだから訊いておく」

「どうぞ」

「二人は、結ばれたの？」

「いや」

階段を降りた先には、小さな地下室があった。

麒麟が光る手をかざして、室内を照らす。

部屋の半分は二人用のベッドが占めている。もう半分には、一人掛けの机と椅子。机の上には鍵のかかった小さな箱が置いてあった。リスはベッドに片手を乗せた。半分腐ったベッドは、少女が軽く押しただけで簡単に崩れた。

「二人が生きていた時代から、東西の町は仲が悪かった。ましてやマリアは東の町の町長の娘だ。そんな立場の人間が西の町の人間と仲良くしていたら、他の町民に示しがない。——でもね」

麒麟は机の上の箱を手にとった。

「二人は若かった。他人から押し付けられて、自分たちの恋を簡単に諦めるほど、二人は従順でもなかった。この要塞に二つの町の人々が集まる日——つまりは処刑の日だ。処刑時には断頭の様子を一目見ようと大勢の民衆が集まるからね——その処刑の日の、罪人が断頭台に上げられ、首を切り落とされるまでのわずかな時間に、彼らはこの秘密の地下室で落ち合い、愛を語り合った。この処刑場を建設したのはマリア自身だ。もしかしたら、そのためにこの要塞を造ったのかもしれないね」

「でも、結局は駄目だった」

「そう。時代の流れと共に、罪人を裁判でキチンと裁くようになって、酌量余地なしで死刑になることも少なくなった。処刑場を使う

機会も減って、二人の会うチャンスもなくなっていった。やがて処刑場は改築されて要塞となり、二人の恋は完全に終わりを告げた……と」

キリンは小さな箱の鍵穴を覗き込んだ。

「あ、錆びてるな、これ。これじゃあ鍵があっても開かないや」

「それ、何？」

「分からない。でも多分これが頼まれた物だと思うんだけど。他にそれらしい物はないし」

「開けてみたら？」

「……いいかな」

「いいんじゃない？ 確認ってことで」

「そうだね。開けてみよう」

青年は箱の頭をひと撫でした。

カチツ、と小さい音が鳴った。

壊さないようにゆっくりと開けてみる。

中には綺麗な寶石のついた、お揃いの指輪が入っていた。

そして、箱の蓋の内側には『流された血に最大限の感謝と謝罪を。罪深き恋人、マリアとジョッシュ』と書かれていた。

「……ねえ」

「何だい」

「二人は、結ばれなかったのよね？」

「うん。でも、二人はそれ以上に幸せだったのかもね」

「結ばれるよりも？」

「そういうこともある」

「ふうん」

キリンは箱の蓋を閉めて、ポーチに入れた。

「さあ、出よう。援軍が来る前に離れなくちゃ」

二人は階段を上り、地下室を出た。

要塞を出て、西の町への道を歩いている二人。

不意に、リスが立ち止まり、要塞の方向に振り向いた。もう瓦礫しか残っていないので、要塞跡と言う方が正しいが。

「どうしたの？」

「キリン。今日は弾をたくさん作ってきたって言ってたよね」

「うん」

「球の赤。あるだけ出して」

「分かった」

キリンはポーチから二十発近くの赤い球を取り出した。

「あと、カタパルトも」

空中からカタパルトを召喚して、リスに手渡す。

「弾はどうするの？」

「そこに置いて」

キリンは持ってた球を全部、地面に置いた。

それをリスはまとめてカタパルトに装填する。赤い球が二十発、裂けたY字の先に浮いている。

「キリン」

「何」

「地下室も、要塞の一部だよ」

「そうだね」

「じゃあ、いいよね」

「いいよ」

青年は快諾した。

リスはカタパルトを大きく、小さな身体を弓なりに反って、大きく振りかぶった。

要塞跡までは二百メートル強。

リスはカタパルトを振り切った。二十発の赤い球がまとまって、要塞の方角へと飛んでいく。青い空に綺麗な放物線を描いて、弾は狂いなく要塞跡へと着弾した。

森の木の葉が一斉に吹き飛ぶほどの、衝撃と轟音。

きこの雲が、要塞のあった場所から昇った。

「お見事。あれなら地面を五メートルは決ってるね」

リスは何も言わずカタパルトをキリンに渡した。亜空への収納。

二人は再び西の町へと歩き出した。

「指輪、誰に渡すの？」

「報告ついでに、神父にでも預けようと思う」

「いいの？」

「まあ、これに関しては僕らがどうこう言える立場じゃないからね」

「そう」

「でも、少なくとも要塞はなくなった。争いの種の一つはなくなった、と言ってもいい。あとはこの指輪を見て、町の人たちがどう思うかは、僕らの知ったことではない。そうだろう？」

「うん」

少女は頷いた。

二人の背中で、雲が空に散っていく。

＊ 要塞ブラッディマリアの歓楽 おわり ＊

有翼空母エリ・マルクの追懐（1）

「リス」

雑貨店で小さなカエルの置き物をじっと眺めている少女に、キリンは咎めるような声を投げた。

「……………」

リスは振り返って、青年の顔を見た。

「そんな顔しても、買わないよ？」

「何で？」

「お金が勿体無い。そもそも、どこに飾るのさ」

少女は憮然とする。

二人は雑貨店から出た。

大きな町だった。都市と言っても良い。

通りには人が溢れ返っていて、ぶつからずに歩くのが難しい。二人は横に並んで、町外れに向かって歩いていった。

「買うものは、もうないよね？」

青年は雑踏に負けないように、少し大きな声で話した。

「しばらくこの大陸から離れるから、必要なものがあつたら今のうちだよ」

「ない」

「本当？」

「カエル」

「駄目」

二人が向かう先には、平均的な建物五十階相当の塔が立っていた。根元から上に行くにつれて細くなり、中間地点からまた太くなつていく。最上階付近は一階よりも大きくなっていた。遠くから見ると、塔の頂上部はブーツのような形状をしている。ブーツの足首部分は全面ガラス張りで、青空を映して青く輝いている。側面も一部

がガラス張りだった。また、側面には断続的に楕円形の穴が並んでいて、そのいくつかの前には有翼船が停まっていた。

「キリン」

「何？」

「ケラススまで何時間？」

「四時間ってところかな。風にもよるけど」

「じゃあ、おやつ」

「酔うよ？」

「大丈夫……だと思おう」

「駄目。前に船乗ったときも、気持ち悪くなってたでしょ」

「ケチ」

「本当に大丈夫だったら、船の中で買ってあげる」

二人は塔の根元に着いた。

開け放たれた入り口から一階エントランスに入る。数十個の扉が壁に並んでいた。全部エレベーターである。乗る人間と、降りてきた人間が、エントランス内を忙しく往来していた。

丁度一階に降りてきたエレベーターに、二人は乗った。他にも五人ほどの客を乗せて、扉は閉まる。ボタンは二つしかない。一階と、最上階だ。

ぐいと身体が重くなる感覚。エレベーターが上昇する。

三十秒ほどで、最上階へと到着した。

扉が開く。

ターミナルには地上と変わらぬ程に、人が溢れていた。天井のガラス窓から光が差し込んで、薄明光線のように床に降り注いでいた。右へ左へと流れる人の流れをかいぐぐって、二人は受付にやってきた。

「こんにちは。有翼船ご利用の方でしょうか？」

窓口から若い女性が顔をのぞかせる。

「はい」

「ご予約などは？」

「してあります。予約番号は丙の045004です。これが手形です」

麒麟はポーチから印の押された紙片を取り出して、女性に渡した。女性はその印を見て、大きく目を見開いた。印と青年の顔を見比べる。青年が不思議な顔をしたので、女性はごほんと咳をした。

「失礼。少々お待ちください」

窓口の奥で、女性は手元の帳簿を確認する。

「麒麟様、でよろしいでしょうか？」

「はい」

「同乗者一名、十三時二十分発アシュラム大陸ケラスス行き、で間違いないですか？」

「はい」

「確認しました。こちらのチケットを持って、出発二十分前までに搭乗してください」

女性から二枚のチケットを渡される。

「分かりました」

「よい船旅を」

笑顔で見送られ、二人は待合席へと移った。

二人が見えなくなると、女性は慌てて隣の窓口の同僚の肩を叩いた。

「ねえねえ、これ見て」

「何？」

手形を見せる。

同僚も同じように目を見開いた。

「これって、ケラスス王家の紋章じゃない」

「そうそう。それってつまり、ケラスス王から直接招待されたってことよね？」

「そうなるわね」

「普通の男の人だったわよ。しかも女の子連れてた。何だか怪しい。もしかしてスパイかも」

「でも予約は確かだったんでしょ？」

「うん」

「じゃあ、何も問題はないわね」

女性はつまらなそうに唇を尖らせた。

「つれないなあ。もつとのつてきてもいいんじゃない？」

「そんなに暇じゃないの」

「ちえっ」

子供のように拗ねる。手形をひらひらと揺らしながら、机の引き出しの中にしまった。そして新しい客が窓口の前に来て、瞬時に笑顔をつくった。

有翼空母エリ・マルクの追懐（2）

その女性はソファアに深く腰を沈めて、ターミナルの屋根と、停泊している有翼船を、半分眠りながら見下ろしていた。目は半開きで、口からはだらしなくよだれが垂れている。

管制室は塔頂上部の、ブーツで言うところの足首部分にあたる。全面ガラス張りなので、三百六十度の景色が見渡せた。管制室の中では管制官や添乗員などが慌しく動き回っていた。

「コアラ君」

女性の背後に誰かが立った。女性は気付かない。

「コアラ、君」

「え……あ、ひゃい」

女性は口元を制服の袖で拭って、立ち上がった。

背後には貫禄のある髭を生やした壮年の男性が立っていた。

「何でしょうか、管制官長」

ビシッと、直立不動の姿勢を取る。

「君は、何年目だい？」

「は？」

「有翼船の操縦士になってから」

「えっと……四年目であります」

「そう。もう新人じゃない。もっとしっかりしてもらわなくては、本当の新人たちに示しがつかないのではないかね？」

管制室には女性よりも若い操縦士たちがいた。管制官に叱られている女性を、曖昧な同情を含めた視線で見ている。

「すみません。以後、気をつけます」

「……まあ、よろしい。ところで、君はケラスス行き045便に乗る予定だね？」

「はい」

「気を付けたまえ。ケラスス界限で最近よくない噂を聞く」

「よくない噂、とは？」

ふむ、と管制官長は顎を撫でる。

「ケラススの隣国ペンティゴについては何か聞いているかね？」

「あー、えっと……確か、ペンティゴ国王の次男がケラスス国と揉めてるとか」

「そう。長男は父親に似て聡明なようだが、次男のビアズリー・ペンティゴという奴が、どうしようもない愚図でな」

「官長、仮にも王族を愚図呼ばわりは……」

「事実だ。父親ですら手を持て余し、更生を放棄したほどだ」

「はあ」

「このビアズリー・ペンティゴという男は、ケラススの娼婦に振られたなんていう、笑い飛ばすにも値しない理由で、ケラススに戦争を仕掛けようとしたのだ。まさかそんな私的な理由で軍隊を動かせるはずもなく、未遂に終わったようだがね」

「良かったですね」

「良くない」

カッと、管制官長は目を見開いた。女性は一クツと身体を揺らした。

「話はまだ続く。自国の軍隊を動かせないと悟ったビアズリーは、今度は国外から傭兵を集めたのだ」

「え、ってことは、やっぱり戦争が始まるってことですか？」

「いや。どうやら予定よりも数が集まらなかったようだな、戦争を仕掛けるほどの規模にはならなかったらしい。無理もない。傭兵にだって雇い主を選ぶ権利はある。頭の悪いボンボンの下になんか、誰だっけつきたくない。命を捨てるようなものだ」

「また、そういうこと言う……」

「そこで素直に諦めればいいものを、ビアズリーという男はことごと人根が腐っているらしい。直接対決が無理だと分かると、今度はケラスス周辺で行商人や旅行者から略奪行為をするようになった」

「嫌がらせですね」

「まあ、簡単に言うと、そうだ」

「つまり、よくない噂というのは――」

「うむ。狙われるのは陸路だけとは限らない。腐っても王族の息子だ。有翼船の一つや二つ、持っていてもおかしくはない」

「襲われた場合の対処法は？」

「逃げる」

「……それだけですか？」

女性是不安げな表情を浮かべる。

「君が乗る有翼船は旅客船だ。戦えるはずがない。怪しい有翼船を見かけたら、とにかく全力で逃げろ」

「……分かりました」

女性は壁掛け時計を見た。

「それでは、官長、そろそろ時間なので、失礼します」

「うむ」

礼をして、女性はその場から離れていった。

官長は女性のいた位置から、同じようにターミナルの屋根と、有翼船を見下ろした。その目はどこか達観しているような、自嘲しているような、娘を見守る父親のような――複雑なものだった。

「もしもあれが完成していて、奴が持ち出してきたのなら……逃げすることはまず不可能だろうな」

有翼空母エリ・マルクの追懐（3）

ターミナルの一角に設けられた待合席。その座席のほとんどが、出航を待つ乗客たちで埋まっていた。

045便に搭乗するため、管制室からターミナルに降り立った女性、そんな待合室を横目に搭乗口へと向かっていたが、ふと、見たことのある顔を見つけて、足を止めた。

「あ」

向こうもこちらを見た。

「もしかして、キリン？」

「やあ、コアラじゃないか」

コアラと呼ばれた女性は、キリンが座る待合席へと駆け寄った。

「本当にキリン？　すごい！　久しぶりね！　何年ぶり？」

キリンの手を両手で包んで、ぶんぶんと振る。

「もう五年になるんじゃないかな」

「そうか、もうそんなになるのね」

懐かしむように、コアラは目を細める。

同時に、キリンの横にいる少女の視線に気付く。

「そっちの女の子は、知り合い？」

「ああ、紹介するよ」

キリンはリスの背中を叩いた。

リスは億劫そうに腰を上げ、軽く頭を下げる。

「リスです」

「えーと……キリン？」

「何？」

「キリンって、そういう、アレなの？」

リスが物凄い形相で睨み付けてきた。

「僕とリスの名誉のために言っておくけど、君が想像しているような関係ではない」

「……そう」

疑わしげな顔だった。

「リス。この女の人ね、コアラっていう名前で、秘術士学校の同級生だったんだ」

「へえ」

どうでもよさそうに相槌する。

「制服を着てゐるってことは、もしかしてコアラ」

「そう。有翼船の操縦士になったの。凄いでしょ？」

えへん、とコアラは胸を張った。

「頑張ったんだね」

「そりゃもう。試験通るために、卒業してから一年間みっちり勉強したわ。私はキリンと違って、それほど優秀じゃなかったからね」
ね、と意地悪そうな顔をした。

「コアラと僕では系統が違う。どちらが優秀かなんて、ナンセンスだと思うよ」

「冗談よ。でもそういうところがキリンらしい」

くすつと、また懐かしそうに笑った。

「ここにゐるってことは、キリンどこかに行くの？」

「うん。ちよつとケラススまで」

「ケラスス？」

コアラの丸い目がさらに丸くなる。

「もしかして、十三時二十分発の？」

「そう」

「いやーっ！ 偶然もここまで重なりと恐ろしいわ。それって、私が操縦する船よ？」

「本当？ そりゃあ、楽しみだな」

「気軽に言ってくれるわね。元同級生を乗せて操縦なんて、プレッシャーが半端ないわよ。しかもそれが学年首席だったキリンだなんて」

「そんなこと関係ないさ。僕は有翼船の操縦なんて数える程しかし

てない。コアラの操縦が上手いか下手かなんて、分かりっこないんだから」

「数回経験してる、っていうのがキリンの恐ろしいところね……。学校で習う科目でもないのに」

「まあ、今は、色々と手広くやってるから」

「ふうん」

横目で、少女の方を見た。

「ま、詳しくは聞かないわ。もうお互い大人ですものね」

「心遣い、感謝するよ」

「じゃあ、私はもう行くわ。また会えたらいいわね」

女性は軽く手を振って、二人から離れていった。

二人はまた椅子に腰を下ろす。

「あの……コアラ、って人」

リスがぼそつと呟いた。

「うん？」

「あの人も秘術士なの？」

「そうだよ。有翼船はカタパルトと同じで、大地からのエネルギーを主動力にしているからね。操縦士は必然的に秘術士から選定されることになる」

「ふうん」

「前にも説明しなかったっけ？」

「そう？」

「覚えてないんだね……」

青年は溜息を吐いた。

有翼空母エリ・マルクの追懐（4）

操縦室に、椅子は二つ。

右側に操縦士、左側に副操縦士の椅子。

ちなみに、副操縦士は秘術士であることが推奨されているが、絶対ではなく、秘術士でなくともなることができる。今回、コアラの補佐をする副操縦士は普通の人間だった。コアラよりも二歳ほど若い青年である。

「コアラさん、出航準備完了しました」

「了解」

ガラス越しに、外を確認する。

ターミナルから突き出した足場で、管制官が緑色の旗を振っていた。

「十三時二十分発ケラス行き045便、定時出航します」

コアラは操縦桿を握った。

キーン、と鋭い音が船全体を駆け抜けた。操縦室の壁に埋め込まれたエネルギー安定球が淡く発光する。コアラは操縦桿を握る。操縦桿は一見単なる棒にしか見えないが、それはカタパルトと同じ材質で作られており、触れている者の意思によって船内に流動するエネルギーを制御することができるようになる。

「離陸」

百人以上を収容する旅客用有翼船。

その形は、魚に似ている。もっと言えば『翼の生えた胴の太い魚』だ。

翼裏面からのエネルギー放出によって揚力を得た巨大な魚は、搭乗口から二十メートルほど浮かび上がる。

「発進」

その後、後方――魚で言うところの尾鰭から推進用のエネルギー

を噴射して、滑るように前へと進んだ。

「……ふう」

コアラは肩の力を抜いた。

「相変わらず滑らかな出航ですね」

「ありがとうございます。でも本当に大変なのはこれからでしょう？」

「そうですね」

「それに今日は特別ゲストがいるんだから」

「は？」

「何でもないわ。こっちの話」

コアラは強引に話を打ち切った。

操縦室のガラスからは、大陸の海岸線が見えた。その向こうには海。

彼方の水平線をしっかりと見据えて、コアラはいつになく神経を集中させた。

客室は内側と外側の二重構造になっている。

まず内側。ここには乗客の数だけの座席が均等に並んでいる。出航と着陸の間だけは着席している必要があるが、それ以外は自由に歩き回っても構わない。

そしてほとんどの乗客が航空中に歩き回るのが、客室外側。ここには展望スペースや軽食堂、購買などのアメニティ施設が設けられている。

「あれ？」

展望スペースで窓からの景色を眺めていたキリンは、いつの間にかリスの姿が消えていることに気付いた。

「どこ行っただろう」

キリンは展望スペースから出て、通路に出た。通路では乗客たちが和気藹々とカードゲームに興じたり、談笑したりしている。

その中の老紳士に、キリンは話しかけた。

「すみません。十五歳くらいの女の子、見ませんでした？」

「ああ、見ましたよ」

「どっちに行きました？」

「確か購買の方へ」

「ありがとうございます」

お礼を言って、キリンは購買へと向かった。

購買には甘いパンや干した魚などが売られてる。そのすぐ横のカフェに座っていたリスの姿を見つけて、キリンは胸を撫で下ろした。

「リス」

同じテーブルにキリンも座る。

「勝手にどこかに行かれると、捜すのが大変なんだよ？」

「こんな狭い船内で、迷子になると思う？」

「いや。でも出来るだけ離れないで欲しい」

「分かった」

少女は素直に頷いた。今は。

「お腹すいた」

「到着まで我慢できない？」

「できない」

「……まあ、昼食も食べてないしね。正直、僕もお腹減ってる」

「じゃあ、何か買って」

「酔わない？」

「大丈夫」

「絶対？」

「絶対」

「分かった。じゃあ、これ」

キリンは財布を取り出して、リスに渡した。

「百ペーزن以内だからね？」

「うん」

同年代の少女がそうするように、無邪気に顔を綻ばせて、リスは購買へと向かった。

購買でパンを物色するリスを視界に入れながら、船のわずかな振動に身をまかせる。

「……綺麗に風が読めてる。コアラ、本当に頑張ったんだな」
嬉しそうにキリンは呟いた。

有翼空母エリ・マルクの追懐（5）

「見えた」

水平線にアシュラム大陸の海岸線が現れた。

「ケラススまでは？」

「このまま行けば、あと二十分程ですね」

コアラは操縦桿の横の時計を見る。

「よし、予定通り」

「連絡通しますか？」

「よろしく」

副操縦士は座席の横から、連絡パイプを引っ張り出した。漏斗のようなパイプ先端に向かって声を通す。

『乗客の皆様、長旅お疲れ様でした』

船内に張り巡らされたパイプの中を反響して、副操縦士の声が各フロアに届けられる。

『本船は後二十分ほどでケラススに到着いたします。乗客の皆様は、十分前までに各自の座席までお戻りください。繰り返します——』

天井に吊るされた連絡パイプの端末から声が降ってくる。

通路でくつろいでいた乗客たちは、ぞろぞろと客室内側へ移っていく。

「リス、そろそろ到着だってさ」

キリンは窓際のテーブルの上に突っ伏しているリスの背中をさすった。

「大丈夫？」

答えはなかった。答えられる状況じゃなかった。

リスの目は虚ろで、苦しそうに短く息を吸ったり吐いたりしてい

る。

「だから言ったのに。あんなにチーズケーキ食べるから」

「……美味しかった」

「でも全部吐いちゃったじゃないか」

「後悔はしてない」

やれやれ、とキリンは呆れたように肩をすくめた。

「とにかく席に戻らなきゃ。立てる？」

ふらつきながらも、リスは椅子から立ち上がった。

「あと二十分らしいから、頑張って」

キリンはリスの手を引きながら、他の乗客と同じように客室内側へと向かった。

「コアラさん、乗客全員席に着きました」

「了解」

コアラは額に浮かんでいた汗を拭った。

「さあて、もう一息」

気合を入れ直すように、首をコキコキと回した。

「……あれ？」

副操縦士が声を漏らした。

「どうしたの？」

「いえ、何でもありません。多分勘違いです」

「気になるわね。一応言ってみて」

「あの……何か今一瞬、海が盛り上がったような」

「海が？」

コアラはやや前屈みになって、海を見下ろした。

青い海は、何の異常もなく波打っている。

「何もないわよ」

「だから勘違いですって」

「疲れてるんじゃない？　ちゃんと寝てる？」

「寝てますよ。ちゃんと家で」

「……ごめんね、職場で居眠りしてて」

「あ、決してそういった意味では」

操縦士と副操縦士が呑気な会話をしている、その時。

隣に座るリスを励ましていたキリンは、唐突に顔を上げた。

「どうしたの？」

リスは青い顔をしながら、キリンの顔を覗き込んだ。

「まずい」

「え？」

「有翼船だ。近い」

目を閉じて、感覚を研ぎ澄ます。

「しかも大きい。これは」

キリンは立ち上がった。

「お客様、危険ですので着席願います」

添乗員が注意したが、キリンは構わず走り出した。

「あ、お客様！」

通路を抜け、船先頭の操縦室まで一気に走る。

操縦室の入り口には鍵がかかっていた。キリンはドアノブを握って、軽く力を込めた。カチャッと鍵が外れる音。キリンはドアを開けた。

「コアラ」

突然入ってきたキリンに、コアラと副操縦士の青年は同時に振り向いた。

「キリン！　ここはキリンでも入ってきちゃ駄目だよ」

「真下だ」

「え？」

「この船の真下に有翼船がいる。いや、もとい、船というより――」
海が割れる音がした。大気が揺れる。船も揺れる。

「コアラさん！」

副操縦士が声を上げた。

海が、山のように隆起していた。何か、巨大な体積を持ったものが水面下から出てこようとしている。

「な、何？」

「コアラ、面舵いっぱい！」

キリンの声に、コアラは反射的に従った。

急旋回して、船は右に傾く。客室で乗客と添乗員たちが悲鳴を上げた。

船のすぐ横を、黒い壁がせり上がってくる。

「コ……コアラさん」

副操縦士の声は震えていた。コアラもガラスの向こう側の光景が信じられなくて、絶句した。

「完成していたのか」

キリンは一人冷静だった。

「有翼空母エリ・マルク」

巨大という言葉が陳腐に聞こえるほどの、圧倒的な威圧感。

キリンたちの乗っている船が魚ならば、横にある船はクジラだ。

まるで島が浮かんでいるようである。あまりに巨大過ぎて、キリンたちの船からは側面しか見えない

「これって、まさか……ビアズリーの？」

「だろうね」

コアラはキリンの顔を見た。

「キリン、ビアズリーのこと知ってるの？」

「知ってるも何も、ケラスス王に頼まれてビアズリーに制裁攻撃する予定だったんだよね」

「ケラスス王？ 制裁攻撃？」

コアラは疑問符と共に目を瞬いた。

「それよりコアラ、高度を上げて。甲板に誰かいるみたいだ」
側面をなぞるように船は浮上する。

エリ・マルクの甲板はまだ海水で濡れていた。太陽の光でてらと輝いている。

甲板の真ん中には、数人の男が立っていた。

「ビアズリーだ」

キリンが言った。

男たちの真ん中で、ビアズリーはこちらを見上げながら、嫌らしい笑みを浮かべている。ガキ大将のように子供っぽい顔のくせに、妙な貫禄があった。

取り巻きの一人が二本の旗を取り出して、規則的に振り出した。

「手旗信号か。コアラ、分かるよね？」

「も、もちろん」

操縦室の三人は、じっと信号を読み取る。

「えっと……『素直に貨物を受け渡すのならば攻撃はしない。ただし抵抗した場合には乗客諸共撃ち落す』って言ってるのよね？」

「随分と紳士的だね。行商人は問答無用で襲ってたのに。有翼船を襲うのは初めてだから、流石に慎重になってるのかな？」

「ど、どうしよう」

救いを求めるように、コアラはキリンを見た。

「コアラはこんな場合には、どうするべきって教わった？」

「逃げろって。とにかく全力で逃げろって」

管制官長の言葉を思い出す。

「正しいね。僕が上官でも、同じことを言う」

「じゃあ、逃げるの？」

「貨物を引き渡してもいいけど……ちよつとね」

「何？」

「今の僕の仕事は信用問題なんだよ。だから、乗っていた船が襲われて何もありませんでした、っていうのは具合が悪いんだよね」

「に、逃げるなら逃げましょう！ それとも、貨物を渡すんですか！ だったらさっさと渡しちゃいましょう！」

副操縦士は完全に怯えていた。軽いパニック状態になっている。

「こうしてる間にも痺れを切らして攻撃してくるかも！」

「そうだね。何はともあれ行動を起こさないと」

「何するの？」

「まずは返答だ。えっと、副操縦士さん、頼めるかな？」

「はひっ？」

キリンはいつもと変わらぬ口調で言った。

「この船にも手旗はあるよね？　それで伝えて欲しいんだ。『貨物を受け渡すつもりはない。だが背中を見せるつもりもない。奪えるものなら力づくで奪ってみろ』って。……あ、ついでに『この、ごくつぶし！』ってのも付け加えといて。反応が面白そうだから」

有翼空母エリ・マルクの追懐（6）

客席に戻って来たキリン。

乗客たちは船の揺れや添乗員の慌てぶりから異常を察したようで、不安そうにざわめいていた。

キリンは座席でぐったりとしていたリスの肩を揺すった。

「起きて、リス」

「……うぷ」

口を押さえる。

「大丈夫？」

「何でこんなに揺れるの？」

「ちよつと緊急事態。いける？」

「無理」

「駄目」

「じゃあ聞かないでよ」

「頑張つて。リスがやらないと、みんな死んじゃうよ？」

「キリンも？」

「僕は……うん、僕も」

「嘘」

「時間がないんだ」

「……分かった」

「これ」

キリンは腰のポーチを三つ、リスに手渡した。

「必要な弾は揃ってる。一人で無理そうなら助手を送る。とりあえず外に出よう」

二人は客室から出た。もう添乗員は何も言わない。キリンが普通の乗客でないと、気付いていた。

通路にある非常口から、船の外に出る。

右翼の上だった。

エネルギー放射の振動が足裏に伝わる。潮風が二人の髪の毛をなぶった。

「はい、カタパルト」

空中からカタパルトを取り出して、リスに渡した。

次いで、キリンはリスの頭を撫でた。光の粒子が指の間からこぼれて、リスに吸い込まれる。

「他に何か必要なものある？」

「カエル」

「……分かった。今度見つけたら、買ってあげるよ」

少女は少しだけ笑顔を取り戻した。

「じゃあ、気をつけて」

「うん」

キリンは船内に戻った。

副操縦士はぎこちなく旗を振った。

それを見たビアズリーと取り巻きの男たちは瞬時に顔を赤く染めた。何か叫んでいたようだが、ガラス張りの操縦席までは届かない。甲板に唾を吐き出し、怒り狂いながら空母内に戻って行った。

「もう大丈夫よ、座って」

コアラは立ち尽くす青年に声をかけた。

副操縦士は糸が切れた人形のように座席に落ちる。

「これで……いいんですね？」

「うん。オッケイ」

キリンの声だった。

いつの間にか操縦室に戻って来ていたキリンは、後ろから副操縦士の肩を叩いた。

「ありがとう。どんな反応だった？」

「怒ってました」

「残念。見たかったな」

「キリンって結構性格悪いのね」

「そうでもないよ。それよりコアラ、準備はいい？」

「逃げ回ればいいんでしょ？」

「そう。とにかく敵の攻撃を受けなければいい。そうすれば、リスが何とかしてくれる」

「あの子が？」

「うん」

「本当に？」

「心配しなくても大丈夫。リスはああ見えて、やるときはやるから」
コアラはチラッとキリンの横顔を見た。キリンは気付いているのかい
ないのか、空母の方に視線を向けたままだった。

「来るよ」

空母が唸り声を上げた。震える大気の潮流が船を包んだ。

コアラでも分かった。巨大なのは大きさだけではない。その体内に蓄えられたエネルギーも桁外れだ。始動振動しているだけなのに、エネルギーが空母の端々から迸っている。コアラは唾を飲み込んだ。艦橋がキラキラと閃光を放った。

「避けて」

船は急発進して、左に曲がる。

複数の砲台から発射された弾丸が、側壁をかすめた。翼上のリスは落ちないように足を踏ん張る。

「このまま艦橋の周りを旋回して」

「何で？ 下に潜った方がいいんじゃないの？ 艦橋の周りだと砲台に狙われるよ？」

「だからその砲台を壊すんだ」

キリンの言葉が終わると同時に、右翼から何か小さい物体が艦橋に向かって飛んでいった。そして爆発。砲台のあった場所から、煙が上がった。

「……なるほど」

「まずは本体を無力化しなくちゃね」

「本体？」

「相手は有翼“空母”だよ？」

「大きいのは、伊達じゃない」

有翼空母エリ・マルクの追懐（7）

「ビアズリーの旦那」

「何だ！」

有翼空母エリ・マルクの操縦室。

コアラたちの船とは比べ物にならないほど広い。中央にある無駄に豪華な座席にビアズリー。ガラス窓の前に三つ並ぶように、操縦士の座席。

その真ん中の、操縦士長の席に座っていた三十代の男が、身体ごと振り返ってビアズリーに声をかけた。長いモミアゲが特徴的な、独特の雰囲気を持つ男だった。

「勝ち目がありやせん。今回は諦めやしよう」

「何だと！」

ビアズリーは耳まで真っ赤にして叫んだ。

「艦橋の砲台は全部破壊されやした。本艦はもう死んでも同然です」

「まだ戦闘用有翼船があるだろう！ 全艇出撃させろ！」

「まあ、確かに、普通の相手ならそれも通用したでしょうがね……」

男は脱力しながらガラス窓の向こうを見た。

エリ・マルクと比較すれば稚魚に等しい小さな有翼船。向こうから攻撃してくることはなく、こちらの様子をうかがうように、艦橋の周りを旋回してる。

有翼船が甲板に寄ったとき、男は見た。翼の上に立つ、異常に長いカタパルトを手にする少女。それと、操縦室にいた青年。

「運が悪かったんですよ。まさかあの人たちが乗ってるなんて」

「何の話だ！」

怒り狂っているところを見ると、ビアズリー自身も劣勢であるということは理解しているらしい。

「あっしらの業界では有名な人たちです。たった二人で国一つを滅ぼしたとも聞いてやす。戦闘船を十艇や二十艇持ち出したところで、

勝てるとは思えやせんね」

「く、国一つだと？」

「ええ。各国から危険視されていると同時に、最重要人物としても指定されてやす。懇意にしている王族も多く、おそらくケラスス王とも知り合いでしょうな」

「ケラスス王？」

ビアズリーの眉が跳ね上がった。

あ、と男は口を手で覆った。

「だったら尚更生かしておくわけにはいかん！ 玉砕してでも撃ち落せ！」

「火に油だったか。まいったな」

聞こえないように小さく言う。

「分かりやした。全艇出撃するよう、下の奴らに連絡しやしよう」

「それでいい」

「ただし、あっしも出撃しやす」

「何？」

ビアズリーだけでなく、両側の副操縦士たちも反応した。

「聞こえやせんでした？ あっしも、戦闘船に乗って戦うって言うたんですよ」

「馬鹿な！ この船に秘術士はお前しかおらんのだぞ！ 誰が本艦を操縦するんだ！」

「この二人のどちらかにまかせればいいでしょう？」

副操縦士たちを指差す。

「操縦だけなら秘術士でなくとも可能なのは、さすがにご存知ですよね？」

「しかし……」

「どうせ本艦は機能を停止しておりやす。浮かんでるだけなら、難しいことは何もありません」

「理由は何だ！」

「少しでも勝率を上げたい、では駄目ですかね？ 戦闘船に乗るの

も普通の傭兵たちばかり。一艇でも、秘術士の乗った船があれば、いくらかマシな勝負ができるとは思いやせんか？」

「ううむ……」

ビアズリーは腕を組んだ。

「分かった。さっさと行って来い！」

「へいへい」

男はビアズリーの横を通り、操縦室から出て行った。

操縦室の扉を背にして呟く。

「エリ・マルクが完成したからってわざわざ来て見れば、あの人たちにいくわすとはね」

しかし、と男は含み笑いを浮かべた。

「考えようによっては好都合。せっかくだから利用させて貰いやし
ようか、キリンさんにリスさん」

「出てきた」

エリ・マルクの側壁が開き、そこからこちらの有翼船よりも一回り小さな船がいくつも飛び出してきた。その数およそ二十。

「ここからが本番だよ。頑張ってコアラ」

「ま、まかせて」

言葉とは裏腹に、手は震え、顔は緊張で汗だくになっていた。

「コアラ」

「何？」

「確かコアラって制御系授業の成績、良かったよね」

「学校の話？ 今？」

「だから大丈夫だよ」

キリンは一步下がって、両腕を広げた。操縦室の左右の壁に埋め込まれたエネルギー安定球に向かって、手の平を向ける。

「え、え、え？」

手の平を閉じる。

安定球が一斉に砕け散った。

「わっ！」

船が一気に加速する。

「な、何ですか、これ！」

副操縦士は座席からずり落ちそうになる。

「有翼船の仕組みについては習わなかった？」

「キリン、安定球を壊したのね！」

コアラは前に集中しているため、後ろを見ることができない。

「うん」

「どういことですか！」

明らかに先ほどよりもエネルギーの出力が上がっている。旅客船としてはあり得ない速度で、船は飛行していた。

「戦闘用以外の有翼船は、安全上の理由からエネルギー放出に制限がかかっている。その制限を外したのさ」

「え、でも制限をなくしたら」

「そう。無尽蔵にエネルギーを噴出できるようになる。だから、操縦士の制御力が高くないと、あっという間にエネルギーが枯渇しちゃう。そうなれば当然、揚力を得られなくなって墜落だね」

副操縦士はコアラの横顔を見た。

「そんな不安そうな顔しないでよ」

「でも……」

「そう、コアラなら出来る。秘術士に必要なのは、何よりも『自分なら出来る』という自信だ」

コアラは頷いた。

戦闘船が迫り来る。一斉射撃が襲い来る。

有翼空母エリ・マルクの追懐（8）

今、客席どうなってるんだろうな。凄いことになってるだろうな。と、想像して、リスは吐き気をぶり返した。

外の空気を吸えるだけマシである。この揺れを船内で味わっていたら、もう何度吐いていたころだろうか。

「えい」

カタパルトから赤い弾を撃ち出す。

飛び回る戦闘船の一つに着弾して、ぼんつ、と軽快な音を立てる。破片を撒き散らして、きりもみしながら海へと落ちていく。水柱。

「……うえっ」

一発撃ち出すたびに、膝を付きそうになった。

あと何艇あるんだろうとリスは数えようとして、ちょこまかと動き回ってまともに数えられなかったので、諦めた。とにかく全部落とせばいいんだろう。キリンから受け取ったポーチから赤い弾を取り出して、カタパルトに装填した。慣れない動作で、少し手間取った。

狙いを定める。

一艇、正面から向かってきた。

撃ち出す。同時に銃撃が頬をかすめた。

すれ違いざまに爆発。墜落。水柱。

ぐわん、と船が急旋回した。リスはまた振り落とされそうになる。

「操縦……下手」

不機嫌そうに、リスは呟いた。

次々と戦闘船が撃ち落されていくのを、コアラと副操縦士の二人は驚きと感心の目で見ていた。

「あの子……本当に凄いのね」

「一発も外してないですよ……」
ただただ感嘆する二人に対して、キリンの目は険しかった。
残り二艇になり、その片方もたった今、三人の目の前で撃ち落された。

「やった！ もう勝利は目前ね！」

「はあ、良かった。最初はどうなることかと」

二人は胸を撫で下ろす。

「コアラ」

キリンの余裕のない声。

「どうしたのキリン？」

「操縦、代わって」

「は？」

「コアラはリスの手伝いに行って欲しい」

「な、何でもここまで来て？ どうせなら最後までやらせてよ」

「あの船に乗ってるのは秘術士だ。それもあり腕が立つ」

「え」

「それとリスは本調子じゃない。下手するとリスだけ狙い撃たれて、こっちの攻撃手段を失いかねない」

「あの、えっと……」

「ごめん。でもみんなを無事に帰すためには、それしかないんだ」

キリンは申し訳なさそうにコアラを見つめた。

「……分かったわよ。学生のおかげからそう。いつもいいとこばかり持っていくんだから」

「何か後で埋め合わせするよ」

「今度会ったらディナーでも奢ってね」

「覚えておく」

コアラはキリンに席を譲った。

「あの子——リスって子のところに行けばいいんでしょ？」

「そう。あ、ちょっと待って」

キリンはリスにしたのと同じように、コアラの頭を撫でた。くす

ぐったそうにコアラは目を細める。

「何したの？」

「振り落とされないように、翼と足がくつつくようにした。でも注意してね。両足が離れたら、そのまま海へダイブだよ」

「……さらっと怖いこと言うのね」

「カタパルトの弾の装填を手伝ってあげて。詳しくはリスに直接聞くといい」

「はい」

コアラは操縦室から出て行った。

キリンは座席に腰を沈め、操縦桿を握る。

「……あ」

副操縦士は声を漏らす。

「分かるかい？」

「ええ、何となく。船の雰囲気、変わりましたね」

「秘術士によってエネルギーの制御法は異なるからね。直感でそれを感じ取れるってことは、君、秘術士の才能あるかも」

「なれますかね？」

「君次第だね。先天的な才能が大きい分野だけど、努力して能力が開花する人もいる」

「頑張ってみます」

「うん。待ってるよ」

キリンの微笑みを見て、副操縦士の青年は、コアラがこの人のことを慕っている理由を、少しだけ理解した。

有翼空母エリ・マルクの追懐（9）

「お邪魔するわよ」

髪の毛が強風にあおられてバタバタと暴れる。

「……………」

コアラの顔を見て、リスは眉をひそめた。

「本当に邪魔だった？」

リスは黙ってポーチをコアラに渡した。

「え？」

「キリンに言われたんでしょ」

「……以心伝心ね。少し羨ましい」

「私が言った弾をこっちに投げて」

「了解」

「流れ弾からは自分で身を守ってね。お姉さんも、秘術士なんですよ？」

「キリンみたいにはいかないわよ？」

「知ってる」

馬鹿にされているわけではない。これが少女の素なのだとコアラは同性として感じ取っていたので、軽く微笑ましく思いながら、少女に従った。

「球の赤」

「はい」

ポーチから取り出してリスの背中に投げる。

風に流される前に、カタパルトで背面キャッチ。勢いそのままに、上方から急降下してくる戦闘船向けて撃ち出す。

回避される。反撃の弾丸が降ってくる。

船が急加速。翼上の二人は空気の壁に身体を叩かれ、目を閉じた。すぐ後ろを敵船が落ちていった。すぐに上昇して、戻ってくる。

「さすが戦闘用と銘打つだけあるわね。機動力が比べ物にならない

わ」

「……………」

リスは訝しげに敵船を睨んでいた。

「どうしたの？」

「……筒の赤」

「筒？ ああ、これね」

コアラは先程とは違うポーチから、十センチ程の筒状の赤い弾を取り出した。

「はい」

リスは装填してもすぐに撃ち出さなかった。敵船の動きを見ている。

上昇してきた敵船はアクロバティックな動きをしながら、エリ・マルクの甲板に近付いていた。

筒を撃ち出す。

放物線を描いて飛んでいく球とは違って、筒は直線状に飛んでいく。初速度も速い。それでも回避される。

流れ弾がエリ・マルクの甲板に当たった。

弾は装甲を貫通して空母に潜り込み、内部で爆発を起こした。甲板の一部が吹き飛ぶ。艦橋の中では、ビアズリー達が焦った声を出していた。

回避しながら回り込み、敵船はまた弾丸を撃ってくる。船体を横に倒して、こちらも避ける。

「……ふーん」

何か考えるように、エリ・マルクと敵船を見つめているリス。

「回りくどいやり方」

「リスちゃん、次の弾は？」

眉間に皺を寄せる。

「ちゃん付けは嫌？」

「……いい」

多分、構わないという意味なのだろう。

「それより、お姉さん」

「コアラ。私の名前」

「……コアラさん。もしかしたらあの大きい船、落とすことになるかも」

「大きい船って、空母の方？」

「そう。だから聞いておきたい」

「何を？」

「……コアラさんは、あの大きい船がどういう船か、知ってる？」

「さあ。エリ・マルクって名前しか知らないわ。キリンがそう呼んでいた」

「純戦闘用有翼空母エリ・マルク。あのサイズの純粋な戦闘用空母は世界に数艇しかない。ペンティゴ国が数年前から極秘に建造していた、秘密兵器」

「それがどうしたの？」

「秘密裏に兵器を開発するってことが、どういうことか分かる？」

「……国際問題？」

リスは頷いた。

「あんな巨大な空母、今すぐにも戦争起こしますよ、って言うてるようなもの。近隣国からすれば脅威だし、同盟国からすれば裏切り行為」

「そうね」

「でも、空母が“ある”のならまだマシ」

「うん？」

「他国は文句を言いたくても言えないから。強く言って攻撃されたら大変だから。でも……空母の存在が発覚した上に、その空母が落ちたとなれば、ペンティゴ国は各国から容赦なく弾圧される。下手すれば村八分。少なくとも、今後十年はまともに外交して貰えない」

「大変じゃない」

「だから、聞いておく」

リスはコアラを見た。

「ペンティゴ国に知り合いとか、いない？ ペンティゴ国が没落しても、怒らない？」

「優しいのね、リスちゃん」

「……質問の答え」

「いいわよ、やっても。ペンティゴの人たちには申し訳ないけどね」

「じゃあ、筒の赤、あるだけ」

「はい」

ポーチに入っていた筒を全部、リスの背中に放り投げた。

違和感を、キリンも感じていた。

「へえ」

「どうしましたか？」

副操縦士が首を傾げる。

キリンはどことなく嬉しそうだった。

「ビーズリーに雇われる秘術士ってどんな人なのかなと思ってたら、なかなかどうして、面白い人だなあ」

ますます副操縦士は不思議そうな顔をする。

「もう安心していいよ。この船が落とされることはなくなった」

「えっ、本当ですか？」

「うん。だってあの人、攻撃当てる気ないもの」

そう言った途端に、敵船は弾丸を撃ってきた。キリンは避ける。

「……攻撃してきてますけど？」

「“こちらが避けられる攻撃” しかしてこない、って言った方がいいかな。あの人の技術と、あの船の機動力があれば、もっと厳しい戦いになっていたはずだよ。少なくとも、今頃お互いに数発は被弾していたはずだ。けど実際はどちらも無傷」

「はあ」

「しかも、あの人、わざと空母の周りを飛んでいる。大きな船体が邪魔になって、せっかくの機動力を活かせなくなるだけなのに。こ

れが、どういふことか分かる？」

「……いえ」

「あの人はね、空母を、エリ・マルクを落としたいんだ。しかも回避した流れ弾が当たって仕方なく、っていう名目で」

面白い、とキリンは笑った。

「リスも気付いてるだろうな。あーあ、こうなると分かっていたら、もっとそれらしい弾用意したのに」

話しながら、敵の弾丸を避ける。

「あの船の操縦士に会って、話がしてみたいな。きっと愉快な人なんだろうな」

有翼空母エリ・マルクの追懐（10）

キリンの操縦する船の動きを見て、モミアゲの男は満足げに笑った。

「さすがいくつもの修羅場をくぐっているだけありやすね。察するのが早いこと」

二本の操縦桿を握り締める。

片方は船の操縦用。もう片方は銃の引き金だ。

「高名なお二方を巻き込むのは気が引けやすが——せいぜい派手な茶番を演じやしよう」

リスは男の操縦する船が空母近くを飛行しているときを狙って、三発ずつ、筒の弾を打ち出した。それらは男の船にかすることもなく、全弾空母に刺さった。

貫通力の高い筒の弾は、空母の奥にまで潜って、爆発を起こす。見る見るうちに、空母が破壊されていく。いたるところに穴が開き、煙が立ち昇っていた。

「何をやっておるんだ、あの男はあ！」

艦橋ではビアズリーが喚き散らしていた。

「こつちに当たってばかりじゃないか！ 無駄に戦闘を長引かせおつてえ！」

ビアズリーの怒りを知ってか知らずか、男は綺麗な背面飛行でリスの弾をかわし、その弾は艦橋の根元に着弾した。艦橋が盛大に揺れる。座席から立ち上がっていたビアズリーは尻餅をついた。

「ぐわっ！」

ビアズリーたちに曲芸飛行を見せ付けるかのように、男の船は艦橋の前をくるくると飛び回る。そして面白いようにリスの弾が空母に命中する。

ついに、エリ・マルクは高度を下げ始めた。ゆっくりと海に向かって落ちていく。

「何をしている操縦士！ 浮上しろ！」

「無理です！ エネルギーが破損箇所から漏れ出しているようで、十分な揚力が得られません！」

「おのれえ！」

ビアズリーは血が出るほどに奥歯を噛み締めた。

「ひゅー、怖い怖い。あんな弾当たったら一発でオシヤカでやすね」

リスの弾が目の前を横切るたびに、男の背中に冷や汗が流れた。「本当のところ、国一つを潰したっていうのは誇張だと思っておりやしたが……どうやらまんざら嘘でもなさそうやすね」

エリ・マルクは艦内に溜め込んでいた大量のエネルギーを噴き出しながら、海へと降下していく。細かい破片が先に海に落ちて、水飛沫を上げていた。細かいと言ってもあくまで本艦に比較してであり、その一つ一つが民家一軒分はある。

本艦の船底が水面についた。

強烈に水が叩かれる音。轟音と衝撃が大気を震わせた。

津波が起こる。津波は墜落地点から放射状に広がる。ケラススの砂浜まで届いて、海岸線から大陸側に一キロも水が流れ込んだ。海岸沿いにあった民家や樹木は押し寄せる水に巻き込まれ、引き潮によって海に引き擦り込まれた。後に残るのは濡れた更地。

崩壊しながら、エリ・マルクは海へと沈んでいく。船内に海水が流れ込んで、さらに沈む速度が上がる。半分以上が見えなくなり、艦橋の頭と舳先が残った。舳先の先端にビアズリーの姿があったので、男はついにて“誤射”しておいた。赤い血が咲いて、舳先は崩れ、やがて全てが海の中に消えていった。

エリ・マルクの破片が海面に浮いている。

「ビアズリー、思えば哀れな奴だった……なあって、我ながら似合
いやせんね」

一人で笑って、男は麒麟の船へと方向転換した。

「沈んだね」

「沈みましたね」

操縦席の麒麟と副操縦士の青年は、エリ・マルクの残骸を見下
ろしていた。

「あっ」

麒麟は戦闘船が近寄ってくることに気付いた。

男が操縦する船は真正面から突っ込んできた。

「うわっ！」

衝突する寸前で宙返りする。

そのまま、どこかへ飛んで行ってしまった。

麒麟は残念そうに肩を落とす。

「話、できなかったな」

「何だったんですかね、一体」

「さあ？ でも、まだどこかで会えたらいいな」

「麒麟！」

操縦室の扉が開いた。

コアラが飛びついてくる。その後ろにはリスもいた。カタパルト
を狭苦しそうに持っている。

「やあ、コアラ。うまくやれたみたいだね」

「私は何もしてないわよ。褒めるならリスちゃんを褒めてあげて」

「リス“ちゃん”？」

麒麟は意外そうな顔でリスを見た。

「悪い？」

相変わらずリスは仏頂面だった。

「いや、いい。リスもご苦勞様」

「うん」

四人が操縦席で喜んでいると、大陸の方から初めて見る有翼船が飛んできた。

「あつ、あれ」

コアラが指差す。

「ケラススの船だね。騒ぎが収まったから、偵察に来たのかな」

「いいご身分ね。気付いてたのなら助けてくれれば良かったのに」

「どこどこが戦ってるのか分からずに、武力介入はできないよ」

「本当、国とか世界とかって、面倒」

「同感だね」

四人はそれぞれ笑い合った。

それから。

コアラは予定よりもだいぶ遅れて、乗客をケラススに降ろした。誰もが気持ち悪そうに口を押さえたり、その場にうずくまっていたりしたが、大きな怪我をした人は一人もいなかった。

ケラスス側の管制室で、夜が更けるまでたつぷりと事情聴取を受けたコアラは、その後キリンとリスの姿を捜したが、二人の姿はもうどこにもなかった。残されたコアラは、少し寂しそうに、星の瞬く空を管制室から見上げた。

ペンティゴ国はその後、だいたいいリスの言った通りになった。ただ、エリ・マルクを極秘に建造し、今回の騒動を起こしたのは、前日付けで“勘当”されていたビアズリー——つまりケラスス王族とは関係ない者の仕業として処理されたので、致命的な痛手にはならなかったらしい。

その話を聞いた副操縦士の青年は「何だか可哀想ですね」と言い、コアラは「まあ、自業自得でしょ」と言った。

ちなみに副操縦士の青年はそれからしばらく後に、仕事を一時休業して秘術士学校に通うことになる。コアラに会うと「二重の意味

で先輩ですね」と言って笑った。

コアラは相変わらず有翼船の操縦士として働いている。ただし、今回の事で名が知れ渡ったようで、各地の秘術士組合や有翼船会社から頻繁に呼び出されるようになった。忙しくなって居眠りもできないとコアラは腹を立てた。

たまに、有翼船を操縦しながら、コアラは考える。キリンとリスについて。

あの二人は自分とは違う世界に生きている。それだけは分かった。でも。

世界は違っても、やっぱり同じ人間だと思った。キリンは学生の頃と変わりなかったし、リスとは良い友達になれそうだった。

「今度会えたら、キリンには奢ってもらって、リスちゃんとは二人だけでゆっくり話そうと」

そんな事を、コアラは水平線を見ながら呟いた。

＊ 有翼空母エリ・マルクの追懐 おわり ＊

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7197m/>

CATAPULT ーカタパルトー

2010年10月8日14時03分発行